

地域環境学科の小論文は3つの資料文(うち1つは英文)をもとに2問出題した。資料1は英文で、東京湾沿岸の縄文時代の貝塚調査に関するもの、資料2は生物資源が持続的利用可能であるとは、どういうことかを論じたもの、資料3は主としてエゾシカの、19世紀終わりごろから近年までの個体数の変化、とくに近年の個体数の増加の理由、さらに激増している農林業被害などについて記述したものである。通底するのは「持続可能な生物資源利用」の問題である。

問1は英文の資料1を読ませ、そこに記されている調査結果を、300字以内にまとめさせるものである。これは英文読解能力とまとめる力をみようとするものである。問2では、資料1～3を踏まえて、「持続可能な生物資源利用」はどうあるべきかについて、800字以内にまとめさせる問題である。持続的に利用し続けるためには、再生速度を超えない範囲で採取する必要があるが、縄文時代には、そのようなことを意識しなくても人口が少なかったために、資源が絶滅することはなかったこと、しかし、明治時代には限界を超えて捕獲されたため、エゾシカが絶滅に瀕したこと、その後のエゾシカの資源の保護は、エゾシカの増加とともに林業資源の被害を招いたこと、などを示して、全体を見つづ適切な資源管理が必要であることに言及することを期待している。読解力、思考力、論理構成力などをみることができると考えている。

問1 解答例

縄文時代の東京湾沿岸の木戸作遺跡は、ひとつの時期の集落平均人口は12～18人程度、存続期間は20～30年である。そこに形成された貝塚から、ハマグリが20～30年にわたって大量に、年間を通じて徹底的に取り続けられたことがわかる。しかも、貝のサイズが大きくないことから、現代の商業的な採取と同じような採集圧が働いていたといえる。それにもかかわらず、長期にわたる採取が可能だったのは、ひとつには人口が極めて少なかったこと、ハマグリだけが唯一の資源ではなく、イノシシ・シカなども捕獲対象で、摂取カロリー量からいうと、ハマグリを大きく上回っていたことなどが、理由として考えられる。(約280字)